

環境科学同窓会通信 第32号

Environmental Science Alumni Association Newsletter Vol. 32

目次/Content

1. 淡々と歩む道-環境科学院で学んだ「当たり前を続ける力」

合田 元清(環境科学院 環境物質科学専攻/北日本港湾コンサルタント(株))

2. 興味あることに一直線な学生生活

福田武博 (北海道庁)

淡々と歩む道-環境科学院で学んだ「当たり前を続ける力」

合田 元清(北日本港湾コンサルタント(株))
(環境科学院 環境物質科学専攻)

苫小牧高専専攻科を終了した後、環境科学院では修士課程の2年間を過ごし、廣川淳先生の基で大気化学の基礎を学びました。研究テーマは海洋塩表面の大気化学、Bromide の大量放出に関わる内容とだったかと。。。

廣川先生との出会いは、苫小牧高専専攻科の1年前期、進路を迷っていた中、研究室訪問でお会いしたのが最初だったかと、その日、昼食も誘って頂き、クラーク亭(北区北12条西4丁目1-18)のチキンカツランチを食べた記憶があります。この味は今でも覚えており、たまに妻と通っております。

大学院の2年間は実環境で生じている大気化学反応を室内実験で再現すること、また再現した結果をモデルに当てはめ反応速度論的に説明することに明け暮れました。毎日、朝8時前から実験を仕込み、16時までには終え、結果を廣川先生と議論する。平日はほぼ、そのルーティンで実験をしておりました。最初は、得られた結果の再現性が乏しく、同じ条件の実験でも今日と昨日では結果が異なるといったことが頻発し、苦労した思い出があります。それでも、廣川先生は結果に対し、楽しんでおられ、常に前向きだった姿勢が印象的でした。結局、このような毎日を繰り返すことで、1年後には論文になるのではないかというところまで来て、無事 JPCA(The Journal of Physical Chemistry A)にて報告されることになりました。この2年間で私が学んだことは、未知なことを追い求める、大きな成果を得るために、「日々、自分自身ができる事を当たり前に淡々と行うこと」であり、これが一番の近道であるということです。目の前の支障となることに文句を言わず、常に前向きに取り組み、変わらない毎日だとしても繰り返し繰り返し行うことが良い仕事に繋がるものだということを廣川先生の背中から学びました。たった2年間ですが、修了後10年を迎えるとする私の中でこの教えは大きな糧となっております。

修士課程修了後は、港湾・漁港を専門とする建設コンサルタント企業に入社し、一貫して、港湾・漁港の施設整備に関する計画、既存事業に対する公共事業評価、農水産物輸出やクルーズ船振興方策の検討に従事しています。学生時代に化学だけしか学んで来なかつた私が土木分野に進出したことで就職した当初は何もわからなく、情けない日々を過ごしていた記憶しかなかったです。それでも、先輩社員の皆様の温かい御指導と廣川先生から学んだ「日々、自分自身ができる事を当たり前に淡々と行うこと」を忘れずに続け、9年余りの間に難関資格である技術士(建設部門)を取得し、建設コンサルタント業務における管理技術者として担当者を指導する立場までになることができました。また、今年については、北海道開発局優良工事等表彰の内、網走開発建設部長表彰を頂き、何とか港湾・漁港の技術者として業界にしがみつくことができております。これから先の10年、20年も廣川先生の教えの通り、淡々と道を歩んで参ります。

末筆になりますが、改めて、廣川先生と研究室の皆様には未熟な私を根気よく御指導頂いたことに感謝を申し上げます。最近は御一緒に研究活動を行うことは無いですが、根っここのところは皆様のお考えを受け継いでいると自負しております。今後も廣川先生の弟子として恥ずかしくないよう精進を続けていく所存です。

また、飲みに行きましょう。



写真 1-筆者が施設計画を行った枝幸港の屋根付き岸壁

興味あることに一直線な学生生活

福田武博（北海道庁）

子供の頃から生物が好きで、DNAが生物を構成している基本単位になっていることに興味を持ち、大学では理学部生物科学科に入学。生物の仕組みを細かく探求していき、分子サイズから生物を研究しようと、電子顕微鏡を扱い、3次元構造に関する研究を行っていました。日々研究をしているうちに、機械が並ぶラボの中で、生物ではない「物質」の研究をしていることが、昔に興味を持っていた生物なのか？と心の奥で疑問に思うことが多くなっていました。

そんななか、学内に掲示されていたペンギンのポスターが目に入りました。「国際南極大学カリキュラム」がスタートするという内容でしたが、このポスターを見て直感的に「南極行こう！」と思いつた、すぐにカリキュラムの詳細を問い合わせました。その相手先が杉山教授であり、氷河のダイナミクスという、人生で初めての分野との接点が生まれました。これまで全く意識したこともない「氷河」で、登山経験は数回というレベルの人が、フィールド研究に分野を変えて大丈夫なのか？という心配を持ちつつも、興味が心配を上回り、一直線に環境科学院に進学することを決断しました。

環境科学院に進学してすぐ、5月にアラスカの氷河でアイスコア掘削を行う1.5ヶ月程度の調査に同行することとなりました。初めてのフィールドですので、指導教員たちの背中について行くだけで精一杯でしたが、得意としていた料理で活躍しようと、トンカツを揚げてカツカレーを作るなど、山の上のキャンプとは思えないようなごはんを作ったりしていました。ごはんを食べて作業して寝るという、いつもの生活なのですが、人間活動が全くない世界で、我々だけがポツンといて、そこで生きているという、普段では感じることのできない不思議な感覚はいまでも忘れられません。

夏には、国際南極大学カリキュラムのスイス氷河実習にも参加しました。テレビでよく見かけるスイスアルプスの風景を何ヵ所も見ることができましたが、調査機材を持って氷河上を歩いたり、現地研究者のお話を聞けたりなど、ただ現地を見る観光とは全く異なるとても刺激のあるプログラムでした。同学年の異なる分野の学生も一緒に受講しているため、横のつながりが広がるのも良かったです。

その後、他大学の調査研究に同行する形で、ヒマラヤの氷河調査にも2回同行させていただきました。深い雪に覆われたアラスカや、多くの観光客がいるスイスアルプスとは全く異なり、植生が少ない荒涼とした石と氷の世界です。標高6,000m近い現場は酸素が少なくて体が重かったり、大気が薄いせいか空の色や星空が見慣れたものとは異なる感じたり、そんな山の麓(でも4,000m超えですが)に住む現地の人との交流がこれまでになく新鮮でした。

このように、いろいろな地域で氷河研究の経験を重ねているうちに、第53次南極地域観測隊に参加しないかと声がかかりました。ペンギンを見て「南極行こう」と思い立って3年後のことです。こんなに早く夢が叶うことに戸惑いながらも、即断しました。

南極観測では、氷河末端の棚氷の熱水掘削に挑戦しました。厚さ400m程度ある氷を、熱水を噴出するノズルで融かしながら掘り進んでいきます。10時間ノンストップで、ボイラーに燃料を供給し、ホースを送り、ハンドルを回してノズルを避けていく作業を続け、無事に棚氷を貫通。その後、掘削孔にCTDなどを投入して掘削孔内に満たされた水の特性を計測したり、カメラを投入して底面状況を確認したりしましたが、宝探しをしているようなワクワク感でした。野外観測が終わったら、昭和基地で作業のお手伝いもしていましたが、テレビや本で見たことがある世界にいま自分がいるのだという、不思議な感覚のなかで作業をしていた事を鮮明に覚えています。

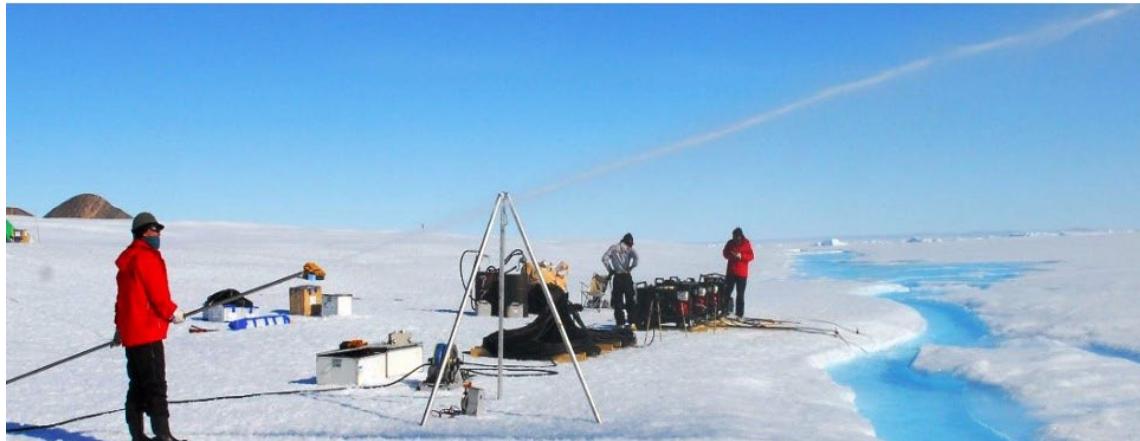
4ヶ月の観測を終え、南極から帰つくると、ひとつの夢を完遂したことで、虚無感のようなものに苛まれます。これからどうしていこうかという具体的なビジョンを持つことができず、ぼんやりと現地で得られたデータを解析する毎日が続いていました。

そんな中、ゴミステーションでエゾシカの角が捨てられているのをたまたま発見しました。増えすぎたエゾシカによる問題については知っていましたが、「(私にとっては)価値あるシカの角でも、ハンターにとってはゴミとなっている」という現状を目の当たりにしたことが強烈に印象に残っています。このギャップを埋めることができれば、エゾシカ問題解決の一助になるうえ、そういった社会を動かす仕事は楽しそうだな、と急に興味を持ち始めました。そうなると昔と同様に、めちゃくちゃ積極的に動きだします。

道庁に入ってシカ対策しよう→現場を知らずに対策は語れない→ハンターの世界を知っておくべき→ハンターの知人はいないので誰にも聞けない→なら、自分で飛び込むか、という考え方で猟銃と狩猟免許を所持し、山に入って独学でシカ撃ちするようになりました。その後、無事に道庁に入庁することもでき、エゾシカ問題に対する想いが伝わったのか、しっかりとエゾシカ対策にも関わっています。

これまで、生体高分子・南極・エゾシカと、そのときにいちばん興味を持っていることに取り組む人生を歩んできました。せっかく氷河で学位取ったのにもったいない、と言われることも多いのですが、学位取得で得られたものは氷河に関する知識だけではありません。フィールド研究で経験した「何をとっても新鮮」という感覚からは、普遍的に役立つ「観察する力」「考える力」をたくさん得ることができたと感じています。

これからも、興味あることを見つけたら一直線に突き進んでいきたいと考えていますが、これらの環境科学院での経験は、いつどこでも活きているものと思います。



写真キャプション「南極ラングホブデ氷河で 400m の熱水掘削に挑む」

発行：環境科学同窓会事務局
〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 5 丁目
北海道大学 大学院地球環境科学研究院内
Fax: 011-706-4867
e-mail: home-coming@ees.hokudai.ac.jp

Issuer: Environmental Science Alumni Association Office
Graduate School of Environmental Science, Hokkaido
University
Kita 10 Nishi 5, Kita-ku, Sapporo 060-0810, Japan
Fax: 011-706-4867
E-mail: home-coming@ees.hokudai.ac.jp

バックナンバーは同窓会HPでご覧に頂けます。

www.ees.hokudai.ac.jp/alumni/main/liaison.html (日本語)

You can visit our back issues page here:

www.ees.hokudai.ac.jp/alumni/main/liaison-e.html (English)